【シンポジウム「プロクロスの影響史II ――中世から近代――」】

プロクロスとクザーヌス、フィチーノ、そしてヘーゲル

（司会）根占　献一

今回のシンポジウム「プロクロスの影響史II ――中世から近代――」は、前年度の「プロクロス『神学綱要』とその影響作用史――中世まで――」を受けて行なわれる。その時の司会者岡崎文明氏がプロクロスの影響はルネサンスを経てヘーゲルに及ぶと言明しているとおりに、ルネサンスのクザーヌスとフィチーノが究明されたのちにヘーゲルが登場するのが本年度である。最初の発表者佐藤直子氏はその「クザーヌスとプロクロス――「絶対的同一者」の概念を中心に――」冒頭で、ドイツ人クザーヌスを中世と近世の移行期の思想家であると述べた。まさにこの意味において、前回を受け継ぐこの度の試みに相応しい哲学者はクザーヌスと言うことになるだろう。

クザーヌスのプロクロスへの関心は、ルネサンスにおけるアリストテレス自然哲学研究のメッカ、北イタリアのパドヴァ大学での学生時代に始まる。この時代の学習仲間には錚々たる人文主義者となる人物たちが大勢いた。更に後年の、長期に及ぶバーゼル公会議（一四三一～四九年）中には多くの人文学者と知り合うことになり、クザーヌスの古典的教養は磨かれていく。若いころは、メルベケのウィリアム（ギヨーム・ド・モルベカ）のラテン語版（『神学綱要』及び『パルメニデス註解』）をプロクロスのテキストとして使っていた。中世のこの版は他の事例同様に完全版ではなかった。一四三七年コンスタンティノポリス滞在の折に、プロクロスの原典（『プラトン神学』）を入手する。祖国同然のイタリアに戻ったのち、ギリシャ語に堪能であり、今日ではディオニュシオス・アレオパギテースやディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』の翻訳者として高名なアンブロージョ・トラヴェルサーリに、クザーヌスは訳を依頼した。このカマリドリ修道会総長が一四三九年に急逝したため実現には至らなかったものの、ピエトロ・バルボ（ペトルス・バルブス）によって訳出され、『プラトン神学』だけでなく『神学綱要』もまたラテン語で読めるようになった。

クザーヌスのプロクロスへの接近は次のフィチーノに較べると、極めてキリスト教的に映ずる。なぜなら、超越論的根源・創造的根源の唯一性、キリスト教的には「一なる神」の理論化にはプロクロス的影響が顕著であるとしても、その根源が三一的な同一性構造を成し、更にはこの構造がロゴスのキリストにおける受

肉の基盤となるというのは、佐藤氏の解釈によれば、クザーヌスがプロクロスを超えようとしているためである。根源的一者が超越的無限者であるとしても、一切のものとの関係を持たないようなプロクロス的「一」ではなく、「分有」概念により被造物の世界と関係性を有し、存在者の根源ともなるような「一」となる。プロティノスに始まる新プラトン主義の歴史において、一者と存在というこれら両者間の明白な区別は、プロクロスの先述の『神学綱要』や『パルメニデス註解』により更に徹底的に深化、先鋭化されていたが、これらの著作に出会ったローマ・カトリック教会の枢機卿クザーヌスはこの間に横たわる深淵を乗り越えようと努めているのであろう。フィチーノは自著『プラトン神学』では両者間の区別を明瞭化していないのに対し、自著『パルメニデス註解』では明白に、古代の新プラトン主義者プロクロスの同名作品『パルメニデス註解』からの影響をじかに受けて、キリスト教神学から離反し始めている。

伊藤博明論文「プロクロスとフィチーノ――『プラトン神学』と『パルメニデス注解』をめぐって――」では、最初にルネサンスにおける新プラトン主義関連の印刷刊行本が紹介されるなか、プロクロス『パルメニデス註解』はクーザン編『著作集』の刊行年、一八二一年から二七年にかけての遅い時代であったことが指摘されている。そして先のピエトロ・バルボのラテン訳は出版されることはなかったという。伊藤氏によると、フィチーノの生涯にわたる思想的探求の目的は、「プラトン主義的伝統とキリスト教神学が教説的に一致していることを明らかにすることであった」。行論中、プラトン『パルメニデス』をめぐるフィチーノとジョヴァンニ・ピーコの相違が指摘される。私自身もかつて「フィチーノとジョヴァンニ・ピーコ――ルネサンスにおけるプラトンの『パルメニデス』解釈の相違について――」(『史観』第一〇八冊〔一九八三年〕)を発表したが、同氏は最新の文献などに基づきながら、イタリアの哲学者間の違いを明確にしている。

ところで、フィチーノはプラトンに先立ちかつプラトンで頂点に達する伝統、「古代神学」としての伝統とそれ以後のプロティノス、ポルピュリオス、プロクロスの伝統の連続性を認めている。伊藤氏は、先行する「古代神学」の伝統中にアグラオパモスという謎めいた人物が登場するのはプロクロスの『プラトン神学』においてであることを指摘する一方、ルネサンスの哲学的シンクレティズムの源泉をこの伝統に見ようとする。これ以外にも同氏はフィチーノがプロクロスから影響を受けたあとを文献学的に丹念に踏査していくなか、フィレンツェの哲学者は自著『パルメニデス註解』で、プラトンが万物の一つの原理であり、万物を超えており、万物の源泉である「一者自体」について論じたが、この「一者自体」にはキリスト教神学における絶対的超越者が読み込まれているという。フィチーノによれば、そのことはディオニュシオス・アレオパギテースにも見出され、自説を補強するうえで役立っている。

同氏はまた存在のヒエラルキーのなかでフィチーノの霊魂の位置付けの詳細な検討を行っている。これはルネサンス思想の特色たる人間の尊厳の主題を見ていく際に重要な論拠となるが、ただ単に存在の位階を成り立たせるためにフィチーノの霊魂があったわけでないことが最後に指摘されている。万物を「一」へとまとめる「結び目と紐帯」としての本性と地位を有していることが彼には重要であった。

フィチーノからヘーゲルへの道は遠い。伊藤博明論文が扱った時代と、最後の伊藤功論文「ヘーゲルとプロクロス」が対象とした時代間には、クザーヌスとフィチーノ間とは比較にならない時間差が横たわっている。クザーヌスとフィチーノは同時代人であり、三〇年ほどのわずか一世代だけの差であるが、フィチーノとヘーゲル間には実に三〇〇年以上の隔たりがある。この間、どのようにプロクロスは読まれていたのか。そして実際にヘーゲルが手にすることができた版はどうであったのか。アエミリウス・ポルトゥスはギリシャ語『神学綱要』の近代最初の編集者であり、またこれをラテン訳している。一六一八年のことである。この版(『プラトン神学』を含む)をヘーゲルは使った。ヘーゲルの時代にあってはクロイツァー版、クーザン版があったが、後者の版は出版年から考えて利用できなかったであろう。クロイツァーもクーザンも、ヘーゲルの同時代の哲学者として新プラトン主義の歴史に欠かせない。一七世紀からこの時代に至る歴史のなかでは、ケンブリッジ・プラトン主義者や晩期のバークレー、そしてトマス・テイラーが落とせないであろう。

さて、新プラトン主義哲学では否定神学的な高みに置かれた絶対的一者から知性が、知性から魂が発出するのだが、伊藤功氏によれば、ヘーゲルはこのような哲学の頂点にプロクロスを置き、そのもとで体系的思考がプロティノスよりも一層完成されたと強調しているという。ヤコービ『スピノザ書簡』を契機に、ドイツ哲学では無限な絶対者からいかにして有限者が発出するかが盛んに議論され始めた。プロティノスでは思惟と異なるエクスタシスでしか一者に触れることができないがゆえに、そのような一者からなぜすべてが発出するかは概念的に把握できなくなる。

こうして発出論理の追究がヘーゲルの課題となってプロクロスに向かうものの、原文から離れた解釈を行なうことで、彼から受けた影響だけでなくヘーゲル哲学自体の独自性が表出する。『プラトン神学』によれば、一者には「一」と「善」の名があり、すべてに存在を与えるものとして「一」と呼ばれ、すべてがそれを目指して帰還するものとして「善」と呼ばれるが、これで一者が言い尽くされているわけではない。プロクロスや新プラトン主義的な否定神学では一者はそれ自体としては言表することも認識することも不可能として超越性が強調されていた。ヘーゲルはその発出と帰還からは捉えられるとして一者の自己分裂や自己発現に着目する。

有限な人間の一者の捉え方には確かに制限があり、この制約を取り除こうとするとき、「否定」が重要な役割を果たす。伊藤氏は「否定」に関する両哲学者の考察を具体的に見たのちに、プロクロスでは「否定」は人間の思惟が行なう働きであり、一者は外に出ることなく自らのうちに自存していたが、ヘーゲルでは「否定」は一者自身の行なう活動であり、自らを否定して多へ分裂し、そこから再び一なるものへ帰還するという。この違いが生じるのは、絶対者と人間の知を通わせるべくヘーゲルでは絶対者そのものに主体性が、知が織り込まれていなければならないからである。そして知性を高く位置づけようとするヘーゲルの姿勢は、先述のポルトゥス版が現代の校訂版と違っていることにも助けら

れている。人間の知が絶対者を捉えうるとすれば、それは絶対者そのものに人間の知と同族的な知が内在しているからであり、否定神学的な一者論をヘーゲルは克服しようとしている。同氏は言う――プロティノスよりもプロクロスがその体系性において高く評価されるのも、プロクロスが知による一者の把捉可能性を志向していると解釈されたからだ、と。

鹿児島の地で研究発表や講演、そしてこのシンポジウムを行うべく、新プラトン主義協会会員が集合し、有意義な二日間を持つことができた。紹介された逸話が思い起こされる。コンスタンティノポリスからの帰途の船上には、クザーヌスとともにプレトンやベッサリオンの東方ビザンツの学者が同船していた。私たちはいわば新プラトン主義の知の拡大のためにこの南方の地で同一船中にいる同志である。私たちも現代にあって研究活動を一段と活発化させ、この極東の列島全体に同主義の影響が及ぶよう努めようではないか。

【シンポジウム「プロクロスの影響史Ⅱ――中世から近代――」】

クザーヌスとプロクロス
――「絶対的同一者」の概念を中心に――

佐藤 直子

一、プロクロス・テキストとクザーヌス

ニコラウス・クザーヌス（Nicolaus Cusanus 一四〇一―六四年）は、中世と近世の移行期の思想家である。彼のなかには古代・中世のすべての思想が流れ込んでいるが、新プラトン主義とりわけプロクロス（Proklos 四一〇／一二―八五年）との対話は彼の思想の一つの軸を成しており、当人もこれを深く自覚している。クザーヌスの終生変わらない興味は、差異と対立に満ち溢れた多様な現実の一なる根源を見出すことであり、その関心を展開する哲学的な枠組みを与えたものの一つがプロクロスのテキストであった。

一四五八年の『緑柱石について』（De beryllo）以降の著作ではクザーヌスはプロクロスの名前を直接にあげながら、そのテキストを引用、あるいは言及することを始める。一四五九年の『根源について』（De principio）では、『パルメニデス註解』（Expositio in Parmenidem Platonis）を非常に多く引用し、一四六二年の『非他者について』（De li non aliud）では『パルメニデス註解』に加え『プラトン神学』（In Platonis theologiam）の引用も目立つ。この『非他者について』で特徴的であるのは、四名の対話からなる本著作の登場人物である。クザーヌス自身である枢機卿とその知己三名が対話者として登場するが、内一名はアリストテレス研究者（Ferdinandus Matim〔クザーヌスの医師〕）であり、二名はプロクロスの翻訳者である。バッスムの修道院長ヨハンネス・アンドレアス（Johannes Andreas〔一四五八年よりクザーヌスの死に至るまでクザーヌスの秘書〕）は『パルメニデス註解』の翻訳者として、ピサ出身のペトルス・バルブス（Petrus Balbus 一三九九―一四七九年）は『プラトン神学』を翻訳中の人間として本文中に紹介されている。彼の手掛けている訳業はまさに、クザーヌスに依頼されたものであった。[1] しかし、クザーヌスがプロクロスのテキストと邂逅したのはその生涯のかなり早い時期であり、前期思想にもすでにプロクロスのテキストを踏んだ記述は散見される。

その証拠の一つとしてBibliothèque Nationale et Universitaire de Strasbourg所蔵の手稿がある。[2] この手稿はもともとクザーヌスの所有であり、ここには断片的だが『パルメニデス註解』や『プ